

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0003 福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA 天神南601号
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.140

2019年7月3日

〈URL〉 <http://www.peshawar-pms.com>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



牛を売る少年。マルワリード用水路が開通し、沙漠化していた地に気が付けば市場が復活。当初は骨と皮ばかりだった牛たちが今では満足げに肥え、活気がみなぎっている。

植樹100万本達成! 2018年度現地事業報告

中村 哲

2018年度会計報告

ペシャワール会事務局

100万本の植樹は私たちの誇り

1本の木もなかった沙漠に、今、木々の葉がそよぐ

ジア ウルラフマン

1本1本に水をやり、防風林の世話をします

ハザラット グル

合法的な食物を生産することの幸せ

アブドル ハナン

苗を育て、木を見守ります

ラフマット グル

PMS、アフガニスタン復興ゼロからの出発

徳永 哲也

PMS訓練所の受講生によるトレーニングの感想

サイド モクタル

水のみもやま話 (4) 「治水」と「洪水制御」——東洋における水

中村 哲

●カラー連載 マルワリード用水路に行く②C地区 (900~1600m 地点)

●カラー特集 祝! 植樹100万本達成!

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

植樹100万本達成!

和平への動きが活発化、干ばつは一時的に解消

2018年度現地事業報告

現地赴任から35年が経ち、いまだに事業が進められていることに不思議な気がしています。医療から始まり、大干ばつで灌漑・農業に力を注ぎ、そして今、温暖化による沙漠化と対峙して河川からの取水技術に集中しています。しかし、追いかけてきたものは変わりません。

PMS (ピース・ジャパン・メディカルサービス) 総院長/ペシャワール会現地代表 **中村 哲**

二〇一八年度の概要

異常気象と和平への動き

二〇一六年から三年間連続して少雨が重なり、アフガン全土が渇水と干ばつに見舞われた。特にヘラートやカンダハル周辺の諸州で著しく、西部で二〇万人など、大量の国内避難民が発生した。キャンプ生活をしない避難民を入れると、実数は発表を上回る。

だが二〇一八年十月中旬から、今度は洪水が発生するほどの多雨となった。豊富な降雨降雪は翌二〇一九年四月まで続き、干ばつは一時的に解消した。

この経過を通じて「安定灌漑」の重要性が認識されるようになり、全土で灌漑への関心が高まった。

依然として都市部で治安が悪く、農村部では秩序維持のためにタリバン勢力に頼る村落が圧倒的多数を占めている。人々の間で厭戦気分が広がり、和平への動きが活発化している。二〇一八年六月、内戦が始まって以来初の「ラマザン明け休戦」が政府とタリバン勢力の間で実現、東部では完全に協定が順守され、和平への動きを加速した。同年十月、タリバンの「農業・牧畜



PMS農場内のガンベリ公園で、新年を祝う人々(2019年3月21日)

ザカート委員会」が干ばつ避難民救済を呼びかけ、国際団体の保護を表明した。二〇一九年四月には和平国民大会議(ロヤジルガ)が開催された。

東部を根拠地にしようとするIS(イスラム国)は、政府軍やタリバン軍との戦闘に圧されて下火に向かい、限局した動きとなっている。

年度事業のあらまし

全体としてPMSの動きは、水利施設の



カチャラ、コーティ、タラーン、ペラ村に安定した灌漑をもたらすマルワリードⅡ用水路。兩岸の柳への水やりに勤しむ(2019年3月28日)

普及活動へ向けて大きな舵が切られようとしている。

第四次 JICA (国際協力機構) Ⅱ PMS 共同事業 (マルワリードⅡ) は JICA 側の止むを得ざる事情によって第一期工事

の二年間で終了、第二期工事二年間(二〇一八年十月―二〇年九月)はペシャワール会の資金によって引き継がれた。既に緊急工事で全流域に用水路網がいきわたってはいたが、大掛かりな護岸工事、排水路網整備などは残され、現在工事が進められている。これによって、二〇一〇年から八年間続けられてきた JICA Ⅱ PMS 共同事業は、広大な地域の安定灌漑と取水設備の技術的完成を成果として残り、新たな段階に入った。

カマ堰^{だまき}再建は二〇一八年二月に終わり、カマ地方七千ヘクタールを潤す安定灌漑の態勢が整った。同時に取水堰の「完成形Ⅱ標準設計」が成り、普及事業へ向けて大きな歩みとなった。一方、FAO (国連食糧農業機関) と継続してきたミラーン訓練所が軌道に乗り、次の展開が模索された。一八年度は二二〇

名が受講、アフガニスタン全国各州の技官レベルが参加して現場を実見、大きな希望を与えた。

現地 PMS と日本側との交流は継続され、一八年七月と十一月に PMS 首脳陣が来日、一九年四月には FAO 事業の一環で山田堰土地改良区の徳永哲也理事長が現地を訪問した。

「緑の大地計画」二〇年継続態勢

一昨年度に打ち出された二〇年態勢は、①既設の PMS 水利施設の維持、②隣接地域への PMS 方式普及、を目的とする。この方針のもとに、一八年十二月以来、マルワリード用水路改修が進められ、同流域住民の結束による水管理が整えられてきた。これと関連して PMS の自立を促進するべく、ガンベリ農場の整備に力が注がれた。日本側もこの事態に呼応して、二〇一六年に「PMS JAPAN (支援室)」が発足、事務作業の円滑化と現地連絡が大幅に改善したが、更に充実が期待される。

1. 医療事業

一八年度の診療内容は表1の通り。地域で残る数少ない診療所となり、重き

表1 2018年度 診療数及び検査件数

国名	アフガニスタン	
地域名	ナンガラハル州	
施設名	ダラエヌール診療所	
外来患者総数	47,128	
【内訳】 一般	38,516	
ハンセン病	0	
てんかん	503	
結核	80	
マラリア	4,618	
外傷治療総数	3,411	
入院患者総数	—	
検査総数	11,205	
【内訳】 血液一般	1,111	
尿	1,688	
便	2,527	
ハンセン病塗沫検査	0	
抗酸性桿菌	167	
マラリア	4,596	
リーシュマニア	610	
その他	506	

をなしている。

2. 灌漑事業

主な工事は表2の通り。

カチャラ堰流域（マルワリードII） 第二期工事

本地域はミラーン堰対岸にあり、四カ村に三万人が居住する。川沿いに長いベルト地帯で、河道が安定せず、沿岸はしばしば洪水が襲って大被害を繰り返し、村民の大半が難民化していた。本地域の安定が今後の全体の維持の上でも要となる^{かなめ}と判断、一六年十月に第四次JICA共同事業として開始された（詳細は一六、一七年度報告参照）。

当初四年をかける予定であったが、急速な治安悪化と大量帰還難民の発生が起き、急ぎよ方針を変更、全域の早期灌漑によって帰還難民の帰農を目指した。

一八年九月までに主幹水路五・六km全線、カチャラI・II・III、コーティ、タラーン、ペラの各分水路を完了、送水を開始、全域灌漑を実現した。

一八年十月、第二期工事（二〇年九月まで二年間）はPMS単独で、総工費二億円はペシャワール会の資金で行われることになった。本流域のもう一つの重要点は、洪水対策II護岸工事である。灌漑と並び、大川沿いの村落復興には欠かせぬ事業として、八・五km全線で本格的な工事が進められている。また、下流域の対岸はミラーン堰があり、河道整備によって同堰を安定させることも大きな目的である。

ガンベリ排水路網の完成

主幹排水路工事（約一・七km）は一七年

十二月に完工したが、ガンベリ下流域、約一・九kmの主排水路は一九年一月、住民間の合意が成立して着工した。これでガンベリ地域の湿地は完全に処理される。

現在までに処理された湿地または湿害地は約千ヘクタールを超え、これによってマルワリード用水路の全流域は給排水分離を整え、完全に耕地を取り戻したと言える。

二〇〇三年から続くマルワリード用水路はこれによって全作業を終え、新たな段階に入る。代わって、一昨年の集中豪雨による被害の復旧、建設時の不備を補う補修工事が着々と進められている。二〇一九年度には取水堰の改修が行われ、「完成形」が建設される予定。

カマ堰改修を完了

カマ堰は二〇一二年に竣工していたが、より完成された形を求めて改修が繰り返されていた。最終工事は一七年十一月から一九年二月まで、約二年をかけて行われた。これによって、流域五〇数カ村、七千ヘクタールを潤す二つの堰の完成形が成り、住民に安堵感を与えると共に、今後の普及活動の基礎を作った。

技術的には堰の砂吐きと洪水吐きの工夫が残された課題であったが、成功したミ

表2 「緑の大地計画」の経過と予定表

堰の名称	所在地	用水路長(km)	施工・実施期間									維持管理期間		
			'03~'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19		
マルワールド堰	クナール州 ジャリババ	27	2019年砂吐き 設置予定	堰造成						沈砂池 改修		取水門 改修	ライニ ング	堰改修
シェイワ堰	シェイワ郡カンレイ村	0.5	河道変遷	堰造成										
カマ第一堰	カマ郡上流域	0.35	安定	堰造成										堰改修
カマ第二堰	カマ郡下流域	1.05	安定		堰造成								堰改修	
カシマバード堰	ベスード郡カシマバード村	0.25	安定			堰造成								
タブー堰	ベスード郡タブー村	0.7				堰造成					廃止、ミラーン堰に統合			
カシコート堰	シェイワ郡 カシコート村	2.5	マルワールド堰 と連続				堰造成							堰の強化
ミラーン堰	ベスード郡 ミラーン村	0.3	750m上流で 河道整備					堰造成						河道整備
シギ堰	シェイワ郡シギ村	0.35	河道変遷					堰造成						
マルワールドⅡ	シェイワ郡カチャラ村	5.6	安定							堰造成				
		38.6												

※2019年度は、マルワールド、カシコート、ミラーンの各堰が最終改修予定。ミラーンは上流750mで堰を築いて河道を固定
 ※シギ、シェイワ堰については河道変化を観察、将来必要ならマルワールド堰流域に統合

表3 2019年度の予定事業の概要

		2016	2017	2018	2019
マルワールド用水路流域	ガンベリ排水路網	主幹排水路			シギ分枝
	用水路再ライニング			1.5km	約2.5km
	取水堰改修				
カチャラ堰流域 (2017年度まで JICA共同事業)	用水路	堰造成	全域送水	排水路網と植樹	
	護岸				ミラーン 付近河道整備
ミラーン訓練所 (FAO共同事業)					候補地調査
JICA共同事業		(カチャラ堰建設)		共同調査	

※カチャラ堰(マルワールドⅡ)は2018年10月からペシャワール会単独資金による事業
 ※ミラーン付近河道整備:ミラーン堰河道の流れを安定させるため、河道固定堰を建設

ラーン堰の方法を取り入れ、一応の完成形とするに至った。より安定した本堰の設計を、「部分可動堰を伴う石張り式斜め堰」の標準として提唱、気候変化で困難になっていたクナール河などの暴れ川からの取水



マルワールドⅡ堰の排水路建設現場で柳枝工を実際に行っている研修生たち(2019年5月30日)

に、今後役立てることが期待される。JICA PMS共同事業の最大の成果である。
PMS方式の普及活動
 FAOと協力して完成した訓練所(一七年十二月落成)で、地域農民指導者、水番、州の技官らを対象に研修態勢が整えられ、一八年度は二二〇名が受講した。
 日本では、ペシャワール会と山田堰土地改良区、テクノ社(久留米)、日本電波ニューズ社らが協力した。堰の模型やビデオなどの教材作成が行われた他、JICAと



2003年からPMSはクナール河20km流域に8カ所の取水堰を建設している

の共同調査に加わって研修事業にも貢献した。

F A Oとは他地域展開を視野に、共同調査も進められている。一八年度はクナール州、ラグマン州の候補地三カ所に絞り、第一次調査が進められた。カプール政府・農業省も関心を寄せ、協力態勢を強めている。

3. 農業事業 ガンベリ沙漠開拓

PMSガンベリ農場

全体の開墾はまだ八〇ヘクタール前後が未開墾で努力が続けられている。これまで小麦や水稻栽培に力が入り、サツマイモ、トウモロコシ、サトウキビ、旬の野菜など、多様な試みが行われてきた。

二〇一八年度は、二〇年継続態勢の中で計画的な備えが痛感された。オレンジについては、将来の主要な出荷品目に加え、管理態勢整備に着手した。二万五千本の柑橘類は移植後二〜七年を経過、少しずつ結果し始めている。計画的な剪定や施肥、無駄のない出荷を実現し、明確にPMSの自活の一助とする方針が打ち出され、農場経営に焦点が当てられた。このために数キロメートルのフェンスを巡らすなど、区画の整

備が行われた。

畜産は現在乳牛四七頭を有し、一日一〇〇ℓの原乳を供給している。広い牧草地を確保できるため、今後も順調な伸びが期待されている。

懸案の養蜂業は、四月、FAOジャラ

バード支部の協力を得て集蜜が開始された。

農場の一角に育てたビエラ約二千本が成長して森を作り、優良な蜂蜜生産が確実視されている(注・ビエラは沙漠に自生する低木で、糖

度が極めて高い花実をつける。

ビエラの蜂蜜はアフガン特産で、

優良な食材である)。既に巣

箱五〇、二カ月で三〇〇

kgを収穫、良好な結果を

得ている。一九年度には

巣箱一〇〇まで増やし、

オレンジからの集蜜も試

みられる。

その他牧草のアルファ

ルフアが半ば野生化し

て畜産に大きく貢献した

が、土壌のpH調整を要す

る茶やレンゲの栽培は不

可能と見て中止した。全

体に、穀類では水稻栽培

に力を入れ、果樹、養

蜂、畜産を主力とする路

線が敷かれた。

植樹

一八年一月〜十二月の

植樹数は四〇、八六九本、一九年三月までの集計で、二〇〇三年以来の総植樹数は一〇〇万本を超えた。

柳枝工に用いられるヤナギが約六割と圧倒的多数を占めるとはいえ、壮挙である。

この間、現地で入手できる樹木の育苗、防

砂林の造成、護岸の樹林帯、斜面保護な

ど、様々な試みが行われた。ユーカリは成

長は早い但他的植生に与える影響があり、

他の高木(乾燥地のガズ||紅柳、川沿いの

シーシャム)に置き換えている。

最も乾燥に強いのはビエラ、ガズ、オリ



ガンベリ農場で養蜂所開所式を行う、中村医師(右から3人目)、徳永さん(右から4人目)とPMS職員たち(2019年4月25日)



ガンベリ農場の牛舎(2019年4月20日)

表4 植樹総数(2003年3月から2019年3月まで)

種類	場所	2003~07年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年(～3月)	合計
ヤナギ	用水路の両岸、河川工事	116,050	55,380	97,380	60,750	73,315	23,650	37,073	18,400	39,650	14,700	30,250	51,750	10,400	628,748
クワ	用水路土手	7,000	2,750	8,578	4,430	140	292	0	0	0	0	0	0	0	23,190
オリブ	用水路土手、オリブ園	2,000	0	840	0	0	0	1,424	1,275	240	136	0	5	0	5,920
ユーカリ	砂防林、護岸樹林帯	2,500	1,000	11,478	39,584	22,350	28,196	7,150	7,500	2,611	500	4,659	2,010	2,180	131,718
ピエラ	ガンベリ沙漠	0	300	600	1,165	165	2,083	175	75	0	0	0	0	0	4,563
ガズ	砂防林	0	15,100	71,300	14,356	9,887	22,317	3,573	780	265	0	0	0	2,000	139,578
シーヤム	護岸樹林帯	0	0	0	0	0	0	4,614	1,400	2,000	6,270	516	660	2,350	17,810
ポプラ	ガンベリ沙漠	0	0	0	4,900	10,786	1,850	0	220	0	0	0	0	0	17,756
イトズギ	モスク、学校、公園	0	0	0	60	195	300	0	0	0	110	0	200	0	865
果樹	ガンベリ果樹園	600	0	0	193	0	6,034	5,283	9,185	1,458	1,822	4,348	4,884	509	34,316
その他		0	0	0	132	190	412	144	50	26	0	1096	597	337	2,984
		128,150	74,530	190,176	125,570	117,028	85,134	59,436	38,885	46,250	23,538	40,869	60,106	17,776	1,007,448

ープで、湿地はヤナギまたはユーカリが適している。総植樹数は一、〇〇七、四四八本である。果樹は三四、三一六本、内訳は表4の通り。

4. ワーカー派遣・その他

現地PMSとの交流

現場に中村一名が常駐した。

実情を知る上で現地との交流が不可欠であるが、依然として邦人が渡航しにくい状態が続いている。一七年に続き、七月、十一月と二度にわたり、FAOとJICA共同調査の一環として、ジア院長補佐、ディール、ファヒム(土木技師)、アジュマル(農業技師)、ハニフラー、サブール(事務会計)が来日、交流を通して相互に理解を深めた。

共同調査

JICA共同調査は、各方面の協力を得て、一七年四月から始まったが、二〇年十二月まで継続される。評価は「緑の大地計画」全体のもので、灌漑前後の農村の変化、水利施設の機能について行われるが、今後の改善点らについても議論が進められている。



シギ排水路工事風景。軟弱地盤であるため地盤改良に苦戦しているが、排水効果はめざましい。周りのガズは根腐れし、枯死している(2019年5月7日)

調査とは別に、専門家の手で取水設備の標準化と建設基準がまとめられる予定で、今後の普及活動に備える。

その他

四月中旬、異常な降雨でクナル河が一部で氾濫、PMS作業地ではバルカシコート村、ベラ村で溢水し、村落を脅かした。被害は軽微であったが、緊急事態と見て護岸工事を行い、それ以上の被害を防いだ。カプール河流域ではカシマバード堰(バス

ード第一堰)で溢水寸前まで水位が上昇したが、事なきを得た。

二〇一九年度の計画

二〇一八年度の連続である(表3)。

灌漑関係では、①カチャラ堰流域は、護岸八・五kmの建設を継続、②マルワリード用水路は、取水堰の改修と四・八km地点までの再ライニング(水路床覆工)、③カマ堰右岸(ベスード側)堤防のかさ上げ、④バルカシコート村の堤防強化、⑤ガンベリ排水路・シギ分枝(一・九km)の完成が予定されている。

取水設備普及のための研修は、二月、FAOとの提携が成り、主にカブール政府や自治体の技官を中心に行われ、各論の作業工程の習得も行われる予定である。また、引き続きラグマン州の灌漑計画調査をFAO技術陣と進める。

PM S農場では、オレンジ園の計画的なケア、養蜂の研究と蜂蜜増産、牧草地の確保と牛舎の拡張が、大きな課題である。

二〇一八年度を振り返って

無事に一年が過ぎました。現地赴任から三五年が経ち、いまだに事業が進められていることに不思議な気がしています。

正確には一九八四年ペシャワール赴任、八八年のソ連軍撤退開始と同時にアフガン東部の山岳地帯へ活動を広げ、二〇〇〇年の大干ばつに遭遇、その惨状に医療の無力を骨身に覚え、診療所周辺の村落救済に奔走、飲料水確保で井戸の掘削、次いで灌漑による農業復興、大河クナルからの取水、暴れ川と対峙するうちに年月が経ち、気づいたらお爺さん——という訳です。この間、二〇〇一年にアフガン空爆、米軍の進駐、そして撤退開始、振り返れば慌ただしいことです。

日本でもバブルとやらが膨らんでは消え、失われた二〇年などと言い、右往左往するうちに昭和↓平成↓令和と時代が変わり、慌ただしくなりました。しかし、通信・交通の便だけ、悪いことも沢山、速やかに起きるようになりました。

現地事業はまるでこのような世相を無視するように、続けられています。医療から始まり、大干ばつで灌漑・農業に力を注ぎ、そして今、温暖化による沙漠化と対峙して河川からの取水技術に集中しています。しかし、追いかけてきてきたものは変わりません。むしろ、ここでは必然の成り行きだったと思われまます。

更に竿頭かんとう一步を進め、この事業の恩恵を

拡大すると共に、私たちの軌跡が人々を励まし、神意に適うものであることを祈ります。併せて、これまでの温かいご関心とご協力に感謝致します。

二〇一九年六月 記



中村 哲なかにくさ たく九州大学医学部卒。専門は経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て一九八四年

パキスタンのカイバル・パクトウンクワ州(北西辺境州)の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PM Sをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保(井戸掘り・カレーズ)の復旧。作業地千六百余カ所以上。事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通。ドラエヌール診療所の年間診療数約四七、〇〇〇人(二〇一八年度)。

2018年度の主な収支

期間 2018年4月～2019年3月

一般会計(単位:円)

[収入の部]

1 会費・寄付	269,742,892 ①
2 補助金等	0
3 利息雑収入	667,779 ②
4 収益事業収入	882,558 ③
5 基金より繰入	50,000,000
年度収入計	321,293,229
前年度繰越	84,631,329
収入計	405,924,558

収益事業会計

[収入の部]

書籍売上	3,927,761
DVD売上	840,694
雑収入	480,774 ⑦
売上収入計	5,249,229

[経費の部]

書籍等原価	3,725,553
販売費	325,318
事業所税等	315,800
経費合計	4,366,671
収益事業収入	882,558

「いのちの基金」残高

期首残高	790,000,000
一般会計に繰入	50,000,000
期末残高	740,000,000

[支出の部]

1 現地協力費	326,864,502
うちPMS運営協力費	14,444,303
アフガン事業費	301,841,999 ④
ワーカー費	1,227,420 ⑤
渡航費	6,900,918
国内活動費	2,449,862
2 広報費	9,382,846 ⑥
3 事務局費	17,582,533
年度支出計	353,829,881
基金への繰入	0
次年度繰越	52,094,677
支出計	405,924,558

- ① 会費・寄付(個人15815件/団体537件)
- ② 利息、為替差益
- ③ 収益事業会計から
- ④ 農業用灌漑用水路建設等
- ⑤ 現地支援ワーカー等
- ⑥ 会報印刷・送料等
- ⑦ カレンダー印刷写真使用料等

'18年度会計報告

●2018年度事業額(支出ベース)
353,829,881円

監査報告書

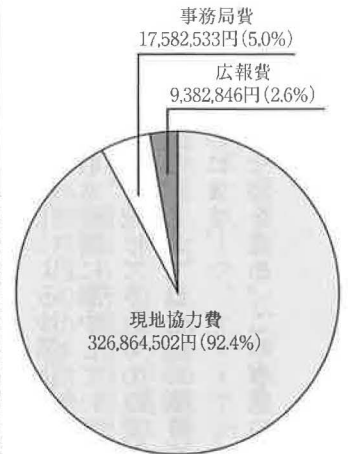
2018年度ペシャワール会会計については適正に会計処理がなされているものと認めます。

2019年5月30日 ペシャワール会 監事
美奈川茂章

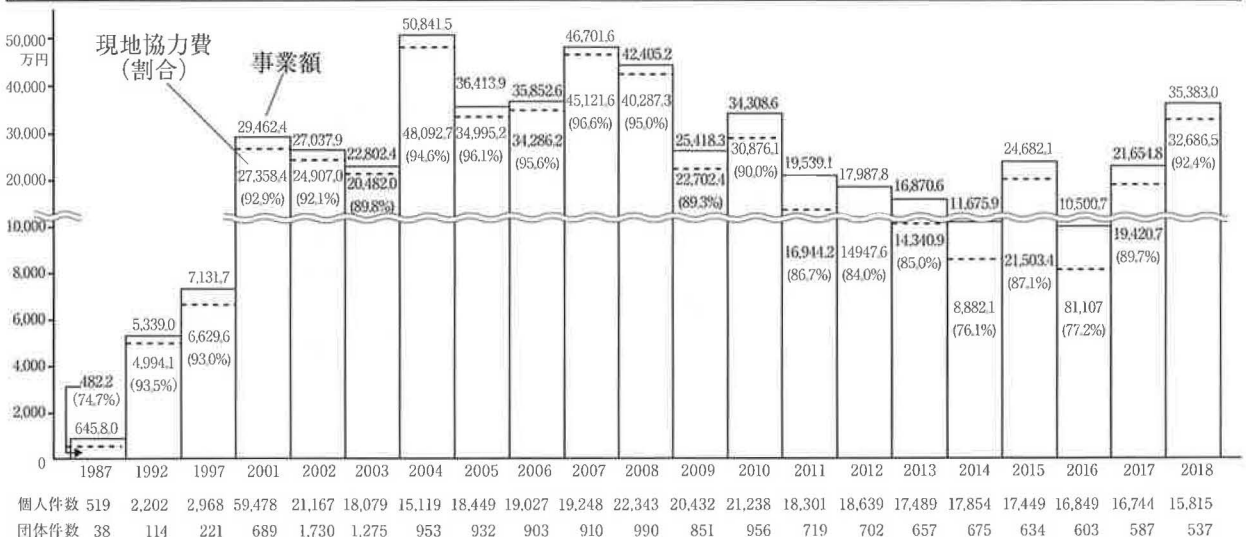
未使用切手、書き損じ葉書の寄付

寄付いただいた件数	578件
未使用切手枚数	59,666枚
同 金額	2,723,947円相当
書き損じ葉書枚数	19,096枚
同 金額	887,148円相当
合計金額	3,611,095円相当

*会報発送費用に活用しています。



事業規模(会費・寄付件数、事業額)の推移 1987～2018年度





地図は『天、共に在り』（中村哲著／NHK出版）より転載し追記しています

C地区

(900~1600m地点)

◎カラー連載
マルワリード用水路を行く②



マルワリード用水路C地区全景。通水から5年後、用水路はヤナギにすっかり覆われている(2009年4月22日)



建設中のC地区。写真上と同じ場所(2004年3月6日)



1.2km地点で水路が決壊。現地の人々の手によって改修が速やかに行われた(2004年3月1日)

【特集】祝！植樹100万本達成！

2003年「緑の大地計画」開始から16年、各地で植えられた樹木の総数が100万本を超えた。

植樹は①用水路壁の柳枝工、②護岸壁の柳枝工、③護岸のための樹林帯、④防砂・防風用、⑤農業(果樹等)用、⑥景観用など様々な目的がある。



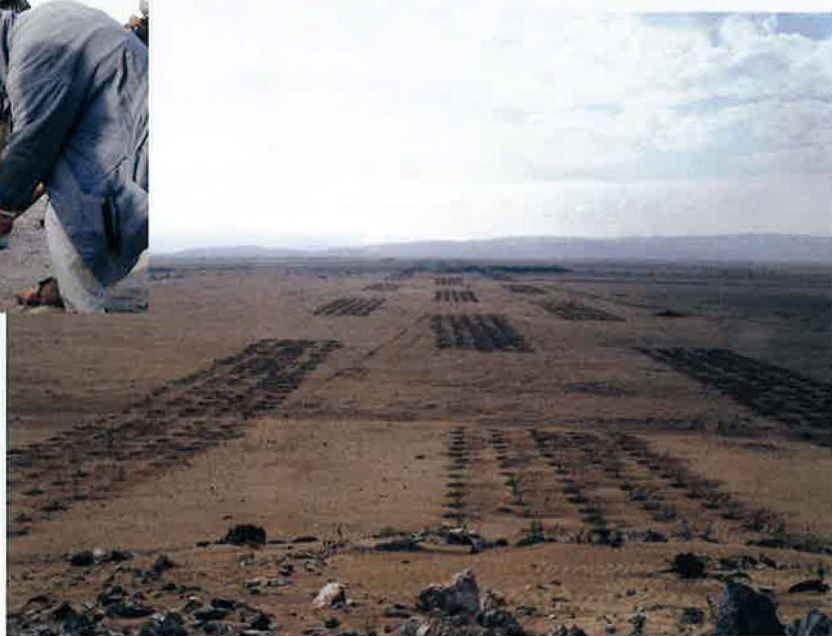
▲写真右下と同地点のガズ防砂林。全植樹の14%に当たる約14万本が植えられ、現在樹高は10m以上にも達している
(2015年10月11日)

↑6年後の同場所



▲防砂林造成の植樹式
(2009年1月1日)

▶植樹直後のガンベリ沙漠。樹冠空間を考慮し全体を千鳥植えにしている。ここが一面の緑になるとは一体誰が考えただろうか(2009年1月19日)





▲開通後8年を経過したマルワリード用水路・ガンベリ沙漠横断路。昔からあったような風格。ヤナギの根が「生きた網」を形成し、蛇籠壁をより強固なものにしている。水量は豊富でシギ下流域まで潤す(2017年7月3日)

▼ガンベリ農場の桃(2016年5月11日)



新しく植樹したオレンジ園で実りを喜ぶ作業員
(2014年9月30日)



オレンジの接ぎ木をする作業員たち(2017年8月14日)



▲炎天下、ガンペリ沙漠に植樹したガズに、ただひたすら水やりをする作業員たち(2009年6月13日)

何があっても ただ水やり
 褒められても くさされても
 ただ水やり
 誰が去っても 倒れても
 ただ水やり
 嬉しくても 疲れていても
 ただ水やり
 風が吹いても 日照りでも
 ただ水やり
 邪魔されても 協力されても
 ただ水やり
 誰が何と言おうと ただ水やり
 魔法の薬はありません
 (中村哲)



▲ヤナギの挿木風景。乾燥すると畝は固くなるため、挿す箇所先に鉄杭で穴をあける(2008年5月13日)

◀子どもたちもみんなのために頑張っています(2007年9月15日)



~~~~~  
 「緑の奇跡」の裏にある  
 努力と願い  
 ~~~~~


◆植樹100万本記念特集

100万本の植樹は私たちの誇り

一本の木もなかった沙漠に、
今、木々の葉がそよぐ

PMS院長補佐 ジアウルラフマン

私は中村先生の指示で二〇〇八年にペシャワールの病院(PMS)からナンガラハル州に移り、ジャラバード事務所です仕事を始めました。ちょうどシェイワ取水堰が完成した時でした。

二〇〇二年に、中村先生が「緑の大地計画」を宣言され、アフガニスタンでの灌漑を考え、毎年発生する洪水から人々をどう守るか、あるいは水位が下がった時にどう備えるかを考えて、クナール河とカブール河で取水堰の建設を始めました。

二〇〇三年、マルワリード用水路の工事が実際に始まり、用水路の両岸には蛇籠を用いました。蛇籠を強化するため、その後ろに柳を植えました。1mに五本、四〇cmから六〇cmの柳の枝を挿して、良く育つように観察し、適時に水やりをしました。

柳の栽培で興味深いことのひとつは、年間通しての成長と手間がかからないことで

す。様々な大きさの柳を護岸壁や取水口に植えました。また、用水路の周辺や上、下流域の多くの地域で、ユーカリ、桑、柳、オリーブなどを育てました。私たちの植樹の目的は、まず畑や村を洪水による荒廃から守ることです。

マルワリード用水路がガンベリ沙漠に達した二〇〇九年には、沙漠に樹木は一本もなく、熱風が吹いて気温が大変高かったので、中村先生の指示で、我々PMSは全長約5kmの人工林の計画を立てました。

樹林帯を造成することは人間にとって非常に価値あることです。我々は林から建築資材や薪、牧畜、ハチミツ、医療材料などを得ることができ、木々は鳥たちにはねぐらを、地域には美しい景色を与えてくれます。

木々の葉が気象条件によって吹く砂嵐を防ぎ、きれいな酸素を出してくれるので、農場や人々の生活にとって非常に貴重なものとなっています。このことが、我々が四・五kmの防風林をガンベリ沙漠に計画した理由です。また、二六七ジェリブ(約五三ヘクター)にオレンジ、スイートオレンジ、

グレープフルーツ、ザクロ、そしてナツメヤシの果樹園を作っています。

その中でも、二五ジェリブの土地に養蜂のための林を造成し、ハチミツを生産して市場に出すことができるように計画しています。

我々は、マルワリード、カマ、カシコート、カシマバード、シェイワ、シギ、ミライン、マルワリードIIなどの取水堰と護岸工事と共に何十万本ものユーカリ、桑、柳、針葉樹、シーシャムの木々を植えました。

現在、神の恵みにより荒野が緑の大地となりました。



緑の大地として甦ったガンベリ農場、遠望する中村医師
(2019年4月27日)

一本一本に水をやり、 防風林の世話をします

PMS植樹担当 ハザラットグル

私はアナールグルの息子でハザラットグルと言います。クズクナール地方のガンベリ村に住んでいます。マルワリード用水路工事がD区に達した時に水路沿いに柳を植える役選ばれました。まず麻袋に土を詰め、それを用水路両脇の蛇籠の後ろに積み、四〇〜五〇cmの柳の枝を麻袋にあけた穴や袋の間に挿します。その後水やりをします。植え方は徐々に変化して行きましたが、水路沿いでは一本当たりバケツ二、三杯分程度の水をやり、成長具合を観察します。水路から離れた場所ではポンプで汲み上げた水をバケツで運んで水やりをします。水路の周辺には桑やガズ、オリーブなどの木を植えています。

マルワリード用水路が到達したガンベリ沙漠では砂嵐が吹くため、防風林を造成しました。この防風林造成は二〇〇九年に開始しましたが、ここでも沙漠に穴を掘り、ガズの木をジグザグに植え、バケツを使って毎日一本一本に水やりをしました。

ガズ林の反対側にユーカリとシーシャムの木を植え、柳の木の列も造りました。そ

れからオレンジ、レモン、ザクロ、オリーブ、グレープフルーツ、ナツメヤシなどの果樹園も造りました。これらの植樹の設計から準備、植林、水やり等の作業は全て私の担当でした。現在も防風林の世話をしており、剪定や水やり用の小水路造りをしていきます。

日本の皆さんには感謝しています。私はPMSのような社会に奉仕する組織で働き、多くの事を学びました。同時に自分たちの生活に良い変化をもたらすことが出来ている自分を誇りに思います。有難うございます。

合法的な食物を 生産することの幸せ

PMS植樹担当 アブドルハナン

私はグルハッサンの息子で名前はアブドルハナンと言います。カシコートに住んでいます。二〇〇三年にジャリババのマルワリード用水路建設現場で働き始めました。

水路の一部が完成した頃に植樹が始まり、私はそのグループに加わりました。最初のグループが水路脇に土を置き、柳を植えるための穴を掘り、第二グループが柳の



果樹の育苗をする作業員 (2019年5月23日)

枝をその穴に挿し木します。水やりをしながら木の成長を観察して行きます。

マルワリード取水口からガンベリ沙漠までの用水路とカシマバード、カマ、ベスード護岸壁、カシコート、シギ、そしてミラーン用水路に至るまで、これまでに何千本の樹木を栽培しました。

現在、私はマルワリードII堰の用水路の両側や護岸堤に植えたユーカリや柳、シーシャムなどの樹木への水やりを行なっています。

ユーカリやシーシャムなどを植える際は、まず地面に約五〇cmの穴を掘ります。そこに土を入れてから木を植え、水をやりながら樹木の成長を観察します。

中村哲医師の著作等

アフガン・緑の大地計画

伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業 【改訂版】

Peace (Japan) Medical Services & ペシャワール会

B5判並製・256頁・オールカラー 1700円 (税込)

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む

1800円

ダラエ・ヌールへの道

2000円

ペシャワールにて

1800円

辺境で診る辺境から見る

1800円

医者 井戸を掘る

1800円

医は国境を越えて

2000円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838人は愛するに足り、真心は
信ずるに足る アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝(聞き手) 2100円

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
岩波書店 電話03(5210)4000天、共に在り アフガニスタン
三十年の闘い

中村哲 1600円

東京都渋谷区宇田川町41-1
NHK出版 電話03(3464)7311

税込表記のあるもの以外はすべて本体価格(税別)です

アフガニスタン DVD

用水路が運ぶ
恵みと平和朗読 吉永小百合
3000円(税+送料込)
ペシャワール会製作1本1本手作業での水やり作業。大切な日課になっている
(2019年5月23日)

祖国のためにこの様な仕事に関わることができ、ケシではなく合法的な食物を生産することが出来て私はとても幸せです。

PMSの仕事には大変満足しています。また、PMSがこれまでに行なってきた全

苗を育て、木を見守ります

PMS植樹担当 ラフマツトグル

私はチャマングルの息子でラフマツトグルと言います。クズクナルに住んでいます。二〇〇三年に用水路建設で掘削機作業で働き、その後水路脇の植樹担当に加わりました。途中からPMSは育苗場を造りました。そこで私は現場でどれ位の苗が必要かを把握して、その苗を栽培します。用水路沿いは四〇cm位、排水路や河川沿いには一m程の柳枝を準備します。柳の挿し木をする時は、石や砂利を取り

での事業に感謝しています。有難うございます。

除きながら硬い地面に五〇cmの穴を掘り、土を入れて一m四方の窪みを造り、五本の柳を植えます。ある程度成長したら、水やりは一日やると三日休むペースで行います。その後は動物から木を守り、子供たちが木を折らないよう観察を続けます。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

▼未使用の切手、書き損じハガキ(官製ハガキ・年賀ハガキ)をお送り下さい

*引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使用させていただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

*ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです(払込用紙がついてきます)。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。パンフレットはA3変形を四折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。(ポスティング等は御遠慮下さい)

PMS、アフガニスタン復興 ゼロからの出発

山田堰土地改良区理事長

徳永哲也

大歓迎にただただ感謝・感謝

このたび、PMS、FAO（国連食糧農業機関）のご配慮により四月十八日から三〇日までの十三日間の日程で、念願のアフガニスタン訪問ができました。

PMSジャラバード事務所への日本人訪問は三年半ぶりとのことで、日本電波ニュース社・谷津賢二氏と共に無事訪問を終了し帰国することが出来ました。

現在の治安では、一般の日本人入国は困難であることを痛切に感じました。

現地でPMS総院長中村先生、院長補佐ジア医師、FAOジャラバード事務所長ホシャル氏他、皆さんの大歓迎を受け大感激しました。心から感謝申し上げます。

PMS農場の中にある、「ドクター中村（ガンベリ）記念公園」では、バラの花などが満開で楽園の出迎えに笑顔をやすことができませんでした。休日には大勢の住民が訪れ憩いの場所になっているそうです。

今回の訪問目的は、「緑の大地計画」の現状を認識し、今後、山田堰土地改良区としてどのようなサポートが出来るのかを探求するためでした。

壮大な「緑の大地・十五カ年計画」

二〇〇二年、広大な荒地一六、五〇〇ヘクタールを農地にする「緑の大地計画」が策定され、翌年から水路建設がスタート。ゼロからの出発となりました。

二〇一〇年のマルワリード水路開通後、クナル河とカーブル河に九カ所の取水堰が築造されました。二〇一九年現在、一六、〇〇〇ヘクタールが農地によりがえり、六五万人が帰農するまでに復興、目標達成間近であることに感銘を受けました。

また、「緑の大地計画」がいかに壮大な計画であるか、アフガニスタンの気候風土を熟知した多数の調整池・サイフォン・湿地帯排水路建設、豪雨時の洪水路確保、カチヤラ堰流域八・五kmに五〇m毎に設置された「石出し水制」等、日本では見られない設計が施されていることに感嘆しました。

多面的機能をもたらすマルワリード水路

二〇一〇年に開通したマルワリード水路は、自然と調和し、岩山に沿って高台を水が流れる約二五kmでした。

用水路護岸は、芸術的と言いたくなる蛇

籠・ふとん籠で造られ、周辺に紅柳・桑・シーシャム・ユーカリ等の植栽が施され、水路全体が豊かな林で癒しの場所となり、多くの住民が団欒し子供たちが水遊びをしている姿を多く見ました。

Q3貯水池の岩山に登りQ2貯水池も見ながら下界を見下ろし、果てしなく広がる林・民家・農地など、人のぬくもりを感じる風景を眺めると、この地が荒地であったことは想像できませんでした。

マルワリード水路は、食糧生産の手段にとどまらず、地下水の涵養、戦争によって失われた美しい農村風景の形成、文化の伝承復活など多面的機能に大きく貢献していくことを確信しました。

感涙！ 時空を越えて「山田堰」再現

カマ第一堰取水口に立ち、堰を眺めると増水した大河クナルの取水堰の瀬の流れ、土砂吐き水流と洪水吐き水流が川の中で合流し、お互いの水流を打消す構造となっていました。

その水流を見ると、増水したときの山田堰と酷似しており、まさに、アフガニスタンにもう一つの「山田堰」が築造された実感がわき、思わず目頭が熱くなりました。

カマ取水堰は流量が多く、流れも速いため、諸国が建設するも全て失敗した困難な河川区域でした。

カマ堰は二〇一二年にPMSで斜め堰方式を採用し運用されていましたが、カマ第二堰を二〇一七年十月から全面改修、二〇一八年三月に竣工、カマ第一堰を二〇一八年十月から全面改修、二〇一九年二月竣工。

中村先生は長年にわたり山田堰を研究しクナール河の特性を観察しました。その食欲なまでの探究心がこの度のカマ堰全面改修にあたり、「PMS方式の完成」をもたらしたのです。

また、中村先生はPMSスタッフが理解しやすい設計図を作成し、カマ第一堰の工事のほとんどをスタッフで完成したとのこと。PMSスタッフの皆さんは今後の取水堰新設・改修に大きな自信を持ったのではないでしょう。

PMS農場二三五ヘクタールの有効活用と農業収入の確保

マルワリード用水路下流にPMSはアフガニスタン政府より二三五ヘクタールの農地の貸与を受け、様々な作付けがなされています。

安定的な農業用水の確保が可能となり、農業生産性の向上に向けた取組みが求められるようになったことは大変喜ばしいことです。

しかしながら、アフガニスタンの農業は

干ばつだけでなく、長い戦乱で伝統農業が途絶え、経験の断絶が深刻な状況をもたらしているようです。

PMS農場で当面確実に期待できる事業として、①酪農、②柑橘類栽培、③養蜂を三本柱に取組んでいるとの説明を受けました。

その中で、七年前から植樹している二万五千本の「柑橘類」剪定の必要性を人々に理解させ、剪定方法を指導して欲しいとの要望が中村先生からありました。

四月二四日、おいしくて大きな「みかん」を収穫するためには、剪定が必要であることを農業責任者アジュマルジャンにノートに図示し説明、剪定の実践訓練を行いました。アジュマルジャンも理解し、七年目の農園の剪定作業を実施することを約束。

PMS農場の土壌は日本の酸性土壌と違いアルカリ性で、柑橘類に適しているの成長が早く七年で七〜八mにもなり、収穫に大変手間がかかります。

剪定作業によってアフガニスタン第一の「柑橘類」ブランド生産地になることも夢ではないと信じています。

また、防砂林の役割と高級蜂蜜生産のため、ビエラ二、五〇〇本の林が造成され、植樹後七年で八m程度に成長、多量の蜂蜜が採取できるのでは、と期待されています。

四月二四日、小生の訪問に合わせて養蜂

所の開所式も開催され、招待者としてテーパーカットを行う記念すべき一日となりました。また、広大なオレンジ園の蜂蜜採取のため巣箱五〇箱が設置されました。

なお、日本の足踏み脱穀機現物を現地に送り、PMSで製造・販売する計画が検討されています。

「緑の大地計画」二〇二〇年継続態勢の確立を目指して

二〇一六年、①既設のPMS水利施設の



農場で剪定の仕方を教わった農業事業の責任者アジュマルジャンと徳永さん。2人で剪定したミカンの木の前で(2019年4月27日)

維持、②隣接地へのPMS方式普及を目的に、ペシャワール会にPMS支援室が発足し現地PMSとの連携・サポート態勢の確立が図られました。

ミラーン堰そばに建設された訓練所を訪問、立地場所として最適で庭園もあり、訓練所として環境整備がなされていました。

二〇一八年一月から訓練が開始され、今後多くの研修生が受講しアフガニスタン全土復興の原動力になることが期待できます。

また、現地PMSに日本人スタッフが常駐できれば、業務の円滑化と中村先生の日常業務の負荷を軽減できるのではないかと痛感しました。

一日も早く常駐できる日が訪れることを願っています。

訪問を振り返って

今回現地を訪問し、ペシャワール会が支援するPMSの活動の成果を実感することができました。

治安が安定し、多くの皆さんと一緒にアフガニスタンを訪問、景勝地マルワリード用水路沿いを歩きながら、「緑の大地計画」の素晴らしさを実感したいと思っております。

大歓迎していただいた、PMS、FAOの皆様にご心から厚くお礼申し上げます。

PMS訓練所の受講生によるトレーニングの感想

ナンガラハル州政府職員

クナール河流域担当 サイド モクタール

私は、ナンガラハル州政府職員でクナール河流域担当のエンジニア サイド モクタールと申します。

私はPMS取水方式を学ぶ7日間の研修に参加しました。研修では、巨礫での堤防の建設、土壌とセメントについての学習、護岸工法と蛇籠への石材の詰め方、柳の挿し木など様々な実際的な仕事について学びました。

挿し木した柳への水やりや成長の観察によって、年間を通して柳を栽培できることを学ぶなど、この研修は私にとって非常に興味深いものでした。植樹の効果を以下にまとめました。

- 1) 環境に効果的である。
- 2) 蛇籠の後ろに柳を植えることによって柳の根が石の間に入って蛇籠を強くし、針金が腐食しても籠の中の石を守ることができる。
- 3) 柳は洪水から堤を守るのに有効である。
- 4) 柳の木は薪として利用できる。
- 5) 暑い季節には、人間や動物が緑陰で休むことができる。緑の景色は人々を楽しませ、多くの人々がピクニックに来ている。多くのアフガン人が精神的に苦しんでおり、彼らがそこで気分転換して幸せな時間を過ごすことができるのは非常に大切なことである。

水のよもやま話(4)

「治水」と「洪水制御」

東洋における水

PMS(平和医療団・日本) 総院長/ペシャワール会現地代表 中村哲

人類が農業という技術を手に入れてから、灌漑は社会の中心的な営みであった。文明は川沿いに発展し、河や泉からの取水、水施設の完備は、為政者の権威に関わるものであった。日本でも弘法大師から江戸時代の無名の庄屋たちに至るまで、治水・灌漑の業績は末代まで語り継がれた。日本で最も親しまれた古典である論語は、孔子の生きた時代、二五〇〇年前の古代中国社会の消息を伝えている。古代の中国人が水や灌漑をどう考えていたかをうかがい知ることが出来る。古代の水の事業がいかに重大事だったか、我々の想像を超える。

◆禹は間然することなし

子曰く、禹は吾れ間然することなし。飲食を菲くして孝を鬼神に致し、衣服を悪しくして美を黻冕(祭壇)に致し、宮室を卑くして力を溝洫(灌漑)に盡す。禹は吾れ間然することなし。(泰伯第八)

禹は堯・舜と並び称せられ、中国史上の

伝説的な皇帝である。孔子が最も敬愛する人物の一人で、「間然(批難)することなし」が二度も出てきて、並々ならぬ賞賛である。禹は五帝時代の聖王・舜に仕え、困難な治水灌漑工事を行って尊敬を集め、禪譲によって皇帝となり、後に夏王朝(紀元前二〇五〇年)を開いたと言われる。相当苦勞した人らしく、その父・鯀も同様に舜の下で灌漑事業に従事して失敗、咎めを受けて処刑されている。遺志を継いだ禹は、十三年間家に帰らず、全国の河川を治め、灌漑で国土を豊かにしたと司馬遷の史記に記されている。

灌漑の失敗で処刑されるという記述を見ると、為政者側の権威にも関わる厳しい事情があったに違いない。農業社会における灌漑は、それほど重要であった。

「衣服を悪しくして美を祭壇に致す」とは、自分の身の回りは質素にして、天を尊び称えることである。これは論語全体を貫く基本的な道德観の一つで、実以上に飾ることを忌避すると共に、自然を司る者(天)

への感謝と祈りを欠かさないことである。

◆質実と水理

衣服や住まいに執着しない質素さは、儒教文化の中で一つの徳目とされ、長く日本人の感じ方・考え方に影響を与えてきた。禹は特にこの点が目立ったらしい。今、川の工事に従事しながら思うと、納得できるものがある。おそらく彼は徹底した現場人間で、直接工事を指導していたのだろう(史記によれば、禹は日焼けして手がカサカサで、水に浸かっていた脚は脱毛していたとかされる)。川の現場にある者は、言葉にごまかされない。水の脅威も恩恵も、ただ水の



花々が満開のPMSガンベリ公園(2019年4月30日)

理を司る神意によって成ることを知っているからである。

理屈より実を重んじ、無用な飾りは意味がないから、衣服なども無頓着である。また、いくら技術や経験を尽くしても、究極的には天意にすがらざるを得ないので、祈りを尽くす。自然の支配者である天、それに対する人間の謙虚さ、その関係に於いてこそ、倫理の基礎がある——と昔の聖人は考えたのかもしれない。

◆「減災」と「祈り」

実際、東洋的な「治水」とは、決して「lood control（洪水制御）」と同義ではない。「治水」の語は、その自然観を含みにもつが故に、英訳できない語の一つである。これに対して「lood control」は純然たる技術用語で、自然を操作の対象としか眺めない。たかが言葉の問題と言えばそれまでだが、我々近代人の意識から自然が遠ざかったのは、言葉の問題も少なからず関与していると思われる。そこで自然とは三人称の物質であり、二人称で語る祈りや対話の相手ではなくなっている。

東洋的な治水は、一般的に自然地形に則り、人と自然、彼我の立場を総合的にみて、徹底した減災を目指している。流水には必ず逃げ道を与え、災難をかわすのであって、力で対抗しない。生命財産の全てを

守るよりは、生命など貴重なものを護るために、ある程度の損失はやむを得ないと考える。津波の高さが16mだったから、16m以上の防潮堤を作れば安全だとは考えない。先ずは危険な場所を極力避ける。もつと言えば、安全と欲望は両立しないので、欲望を減らして危険な冒険を極力避け、力を尽くして天に祈る。そこには単なる技術ではなく、ある種の倫理観が息づいている。

◆知者は水を楽しむ

子曰く、知者は水を楽しむ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。

知者は楽しみ、仁者は寿し。(雍也第六)

これも有名なくだりである。川はしばしば生流転する世界の象徴として登場するが、ここでは流転の中を生きる知恵者の描写である。静と動の対比で、水は動を代表し、一つとして同じ形をとらず、常に動く。

人の知恵もそうあるべきで、大元を見て臨機応変に対処すべきことを説く。マニュアルで固定したり、白黒の定義で決めつけたりしない。「君子は器ならず」という言葉も、似たような意味が込められている。

川の仕事もそうで、究極には定式化できないものを取り扱っている。しかし、動がその時の様態とすれば、静は動を律する不動の倫理を象徴する。それが仁で、知と対

立するのではなく、ここでは両者がバランスを以てあるべきことを詩的表現で述べているのである。

現代は西洋的な合理主義の時代だ。儒教だの論語だのと述べれば、すぐに封建社会、男性優位、家族制度などを連想し、負のイメージを抱く者が増えている。しかし、東洋思想に親しんだ老世代の一人として言い遺しておきたいのは、我々の先人たちが大陸からの文化を吸収し、長い長い時間をかけて自らの精神的な血肉としてきた、その歴史的な奥行きである。それが伝統や文化というもので、我々がこの世界で考え、行動する精神的な土壌をも提供してきた。外国人や現代人が不合理とする表現も、その奥の意味を尋ねるべきで、字面の判断だけで一概に切り捨てるべきものではない。それは政治思想とも無縁のものだ。

◆人間中心主義の錯覚と矛盾

我々の一般的な考え方の根底にある近代的な人間中心主義は、しばしば技術文明への絶対的な信頼に裏づけられている。しかし、ややもすれば、技術だけが先行し、「温故知新」とは逆に、旧きを完全に否定して新しきを作りだせるような錯覚がなかったとは言えない。

一口に自然科学と言っても、自然のどの相を対象にするかですら異なる。

る。例えば原子の世界を問題にするなら、画一的に数学のような法則で割り切ることができると、時間・場所によって千変万化する河川科学はそうはいかない。

科学技術の危険性はその限界を忘れたところから生まれ、人間の欲望・願望と科学信仰とが互いに高め合いながら、恩恵の大きさと比例して、危険をも生み出していく。例えば、我々が優れた堰を作り、強力な護岸法を確立すると、安定した灌漑で村の生活面積と食糧生産が増える。分配の問題はさておき、人口が増えて全体の富が増し、豊かさをもたらした技術が抵抗なく受け容れられていく。だが一旦得たものは手放せない。維持に、より大きなエネルギーを投入せねばならない。当たり前のことだが、自然との関係から見ると、ここに人間の運命的な矛盾がある。技術は基本的に人間の都合を優先するもので、必ずしも自然の動きに適うものではない。

河川に関わった者なら、このことは良く分かっている。自然史を大きく見れば、プレートが動き、海底が隆起し、地震や洪水で山が均^なぎれ、私たちの住まう場所ができた。日本列島の平野ができたのは、たかだかここ一万年ほどのことで、川は地表を削る彫刻刀だ。洪水がなければ我々が住まう場所もなかったのである。洪水制御とは、天体の運行を制御することに等しい。気の

遠くなるような長い自然史の中の、瞬時を私たちは生きている。だが大きな動きは人間に見えにくいので、近視眼的になりやすい。自然の生成—発展—消滅のサイクルの中で、人間だけが無限に発展するかのよう^にに思ってしまうのだ。

●倫理なき科学技術と人間の悲劇

自ら省みない技術は危険である。神に代わって人間が万能であるかのような増長、自然からの暴力的な搾取、大量消費と大量生産—これらが自然環境の破壊や核戦争の恐怖を生み、人間の生存まで脅かしている現実^は動かしがたい。

かつて我々の世代は、学校で次のように教えられた。

「東洋の文化は自然と融和し、西洋は自然を征服する」

河川に関する限り、現在は逆転してしまった。過去の文明の反省から、自然と同居する努力が最も行われているのはヨーロッパであり、日本はやっと伝統工法の見直し^が、それも西欧の動きを流行的に模倣し始めたばかりなのだ。今、気候変化による河川災害の現場で暴れ川と対峙し、温暖化(＝沙漠化)による干ばつ対策に奔走していると、否が応でも「技術の倫理性・精神性」について考えざるを得ない。伝統に帰るとは過去の形の再現ではない。その精神の依

るところから現在を見、自然と和し、最善のものを生み出す努力である。我々に遺し得る最大のものがこの精神のように思われなければならない。

【PMSの動き】

- (1) 3月、植樹数 100 万本に達しました。
- (2) 4月1日、FAO アフガニスタン事務所所長がミラーン訓練所やガンベリ農場、カマ堰を視察。PMS 職員と灌漑地計画協議のためラグマン州知事を訪問しました。
- (3) 4月、山田堰土地改良区・徳永哲也理事長及び(株)日本電波ニュース社・谷津賢二氏の訪問を受け、脱穀機の使用法や柑橘類の剪定法等の農業指導を受けました。
- (4) 4月24日、ガンベリ農場で養蜂事業を開始。
- (5) 5月4日、PMS と中村医師が、ジャララバードのウラマー（伝統的な宗教委員会）より表彰されました。

六月十八日夜間に東北北陸地方で発生した地震により被災された方々もいらっしゃる事と存じます。皆様のご無事と一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

●事務局だより

*六月一日、年に一度の総会・現地報告会が福岡市内で開催され、盛況のうちに無事終了いたしました。会計報告にありますように、二〇一八年度も多大なご支援をいただきました。厚く感謝申し上げますとともに、今後とも末長いご支援をお願い致します。

今号は、明るい話題をお届けすることができませんでした。和平への動きの加速化、干ばつの一時的解消です。三年に及ぶ少雨によって、アフガン全土で灌漑への関心が高まっているとのこと、PMS訓練所の受講生たちが各地で活動してくれることを願っています。

*二〇〇三年から二〇一九年三月までの植樹数が百万本を超えました。ガンベリ農場では二万五千本の柑橘類が育ち、実を結びつつあるそうです。徳永哲也さん(山田堰土地改良区理事長)のお話によると、現地の方々は、せっかく成長して繁った樹木の枝を切ることに初めは難色を示したそうです。でも、徳永さんご自身が剪定された樹木に、この秋、たわわなおレンジが実れば不安は一掃されることでしょう。

*五月二十六日、福岡県朝倉市で「古賀百工翁(筑後川「山田堰」他の大改修に尽力)生誕三百年記念式典」が行われ、中村医師が「山田堰 アフガニスタンの未来を拓く」と題して講演しました。一六六三年に作られ、一七九〇年に大改修が行われ、その後も改修が続けられて今に至っている山田堰。遙か時空を超えてアフガニスタンに出現した「山田堰」を見て目頭が熱くなったと記され、感動を伝えて下さった徳永さんに感謝します。

●PMS支援室より

*三月二一日、アフガニスタンではノーローズ(新年)を迎えました。ジャ医師は初めて家族をPMSの「ガンベリ公園」に案内し新年を祝ったと知らせてくれました。滅多に遠出をすることのない夫人や娘さん達が木々や花々で一杯のPMS公園を目にした驚きと嬉しき、楽しきに想いを馳せ互いに祝しました。

*朝倉の方から頂いた「足踏み脱穀機」を四月にジャララバード事務所へ届ける事が出来ました。昨年日本での農業研修時に見せて頂いた農具の中で、現地職員たちが最も関心を示したのがこの脱穀機と唐箕(羽根車で起こした風を利用してゴミを吹きとばす装置)でした。ガンベリ農場の開墾、作物栽培、収穫が進められ、農具の採用も重要になりつつある今、日本で使われていた道具が参考になり、関係者の皆様のご指導に感謝しております。

◎村から

*事務局にお手伝いに来るようになってどのくらい時間が過ぎたのか、わからなくなりました。最初は、月に一回くらいだったと思うのですが、子供たちも独立し、「ワシも族」でない夫に感謝して、かなり、ペシャワール会に入れ込んでいるような気がします。事務局に来ると、支援してくださっている方々からの払込み票に書いてある言葉に元気づけられます。また、事務局では、人生の大先輩方が、元氣にお手伝いされています。その後姿を見ながら、生き方を見習うこといっぱいです。少しでも哲先生やアフガニスタンの人たちのお役に立ちたいという思いが今の自分の生きがいになっています。

会報を読まれた皆様、福岡に来られる機会がありましたら、ぜひ、事務局をのぞいてみて下さい。びっくりされること間違いなしです(笑) (SH)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州(現。パクトゥンクワ州)ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局を

〒八二〇〇〇〇三 福岡市中央区春吉一―一六―八 VEGA天神南六〇―
Tel.〇九二―七三二―二三七二内におく。

総会、現地報告会は、原則として毎年六月第一土曜日に開催いたします。